中国における食育の推進に向けたプロジェクト（食育と環境との繋がり）

当協会の企業会員と連携した国際協力事業の一環として、平成23年11月に中国広東省佛山市において、食育と環境教育をテーマに広東省内の総合実践担当の教員約100名を対象に研修を実施しました。参加していただいた会員企業は、ハウス食品㈱と㈱リリーフ（旧㈱大栄）で、日本における食育の考え方や企業としても関わり方、ごみ減量への取り組みなどを小学生への実習も行いながら学んでいただきました。

この研修では、小澤紀美子代表理事が日本における「総合的な学習の時間」の位置付けや実践内容について紹介しながら、広東省内での総合実践の実情や課題、食育を取り入れる際の可能性を考えるワークショップを行いました。

広東省でのこうした実践は２年目となることから、研修終了後、活動の仲介をしていただいている華南師範大学環境教育センターとも会合を開き、今後の取り組み方策について協議を行い、企業の協力も得つつ当協会と華南師範大学が協力し、広東省の教員育成などの活動を継続していくことについて確認し合いました。

以下は、本事業に参加した㈱リリーフ社員の福田氏の感想をご紹介します。

ハウス食品（株）松浦氏によるカレー作り指導

株式会社リリーフ（旧株式会社大栄）
福田 和彦

自分の仕事内容が社会にとってどの様な影響を与えるのか、私達が行っている活動をどの様に理解してもらえるのか、文化の違いや価値観、人間関係などを自分なりに経験し吸収することで、自分自身が１つ前進するべきではないかと思い、スキルアップに繋がるために、良い経験になると思い今回参加させて頂きました。

今回のプロジェクトでの私の役割は『食と環境の繋がり』について、廃棄物収集運搬業としての立場から小学生や教員の方にお話をするというものでした。先ず、私自身がしなければいけない課題を出して調べ、自分なりに勉強し、１ヵ月後のためにと思っていましたが、「いや違う、将来のためにと考えなければ」と思い返しました。自分が講師ではなく、子ども達や教員と同じ様に「学ぶ立場」であると思い、今まで生きてきた、私自身の人生観や価値観、また13年間、廃棄物処理で養った専門知識を子ども達の目線（主体）で分りやすく発表しようと思いました。

そして、２日目に今回参加されたハウス食品様とLEAF様、小澤先生と合流し、現地の市場を視察しました。今回のカレーライスに必要なお野菜やお肉などを選んでる最中にも驚く事ばかりで、カエルやワニなどのお肉が普通に売られている光景には驚きました。もちろん、食の文化も違うのですが、様々な出来事を見る機会がありました。本当に良い体験をさせて頂きました。

中国の環境、食文化を、一つの向きからしか見てませんでしたが、周りを冷静に見て、自分なりに感じ考えている間に真剣になっていました。今までこんなに真剣に他人の事や国の事を考えた事はありませんでした。

ハウス食品様と子ども達がカレー作りをした時には、ほとんどの生徒達が包丁を使ったことがなく、カレー作りのお野菜を切るのに苦戦していましたが、みんな笑顔で楽しくコミュニケーションを取る事が出来て、手作りカレーを食べ、教員、生徒から美味しいとの声をいただきました。そして私が発表した「食と廃棄物の繋がり」のお話は、子ども達と交わりながら出来たのですが、もっと解かりやすく、スムーズに伝える事ができればと感じました。

北京では北京師範大学で学生さんに、お話をさせて頂く時間を与えて頂きました。広州での発表事例を紹介させてもらいましたが、子ども達とは違った緊張感があり、伝え方の難しさを実感しました。

中国では、北京師範大学や華南師範大学の学生さんが環境問題に取り組む真剣さや、笑顔、温かさを感じる事が何度もありました。様々な問題を真剣に取り組む人々を中心に、迷っている人や取り組まない人などをうまく巻き込み、全体の雰囲気を押し上げることで、環境問題を解決できると思います。

環境活動支援情報誌　りぃふ
VOL.38　2012年
編集・発行　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）
〒662-0832　兵庫県西宮市甲風園1丁目8-1
ゆとり生活館アミ1階
TEL　0798-69-1185　FAX　0798-69-1186
URL　http://leaf.or.jp　E-MAIL kodomo@leaf.or.jp

★★会員募集★★

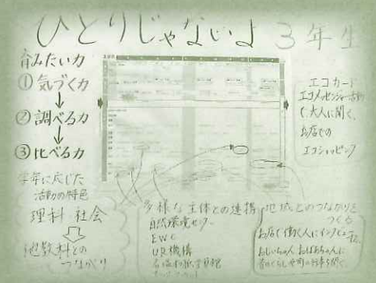
当協会の活動は、個人や団体会員の方々のご支援によって支えられています。子ども達の環境活動を今後も支えていくために、随時会員を募集しています。

会員になっていただいた方には、環境研修会へのご案内や、情報誌等の資料をお送りします。

環境活動支援情報誌　VOL.38

りぃふ

ESDで育みたい力：グループ研究会



つながりを考えた3年生の学習

みんなで作った積み木のタワー

テーマ：持続可能な地域づくり
ー乳幼児期におけるESDを考えるー

もくじ

研究テーマ「持続発展教育ESD」中間報告 ・・・・・・1
子どもの発達過程　0歳から5歳までの保育 ・・・・・3
乳幼児期におけるESD（育みたい力に関する中間整理） ・・・・・・・・5
共同研究「乳幼児期とESD」に参加して ・・・・・・・・7
小学校新任教員研修でまとめたESD「育みたい力」 ・・・・・・・13
企業の環境・SRへの取り組み ・・・・・・・・15
中国における食育の推進に向けたプロジェクト

未来が変わる。日本が変える。 チャレンジ25
2012
Learning and Ecological Activities Foundation for children

持続可能な社会システムの構築とそのための教育

乳幼児保育におけるESD

持続可能な地域づくりにおけるESD（持続発展教育）の重要性は、これまでも本誌で何度となくご紹介させていただきましたし、多くの文献でも紹介されています。しかし、多くの事例は小学生以上を対象としており、就学前の0歳から5歳までの子どもたちを対象とした事例は極めて少なかったように思われます。

古くから「三つ子の魂、百まで」と言われてきたように、人間形成のプロセスにおける乳幼児期の役割は大変重要であり、とりわけ乳児期における「基本的信頼感の形成」は人間の自己形成の基本となり、ESDで求めている「育みたい力」の根底となるものだと考えています。

昨年度、西宮市子育て総合センターが行う幼稚園と保育所の共同実践研究(2ヵ年)において「乳幼児期におけるESD」をテーマとすることとなり、当協会もこの共同研究に参加させていただきました。本号では、昨年度に行った共同研究での実践をまとめ紹介させていただきます。初年度を終えたばかりの中間的な報告であるため整理されていない所もありますが、乳幼児を対象としたESDを考える上での一助になれば幸いです。

平成23･24年度（2011･2012年度）
【グループ研究】中間報告より

研究テーマ「持続発展教育ＥＳＤ」中間報告

■グループ研究の目的

本市の幼児教育にかかわる教育課題について調査・研究を行い、その結果を各校園所に還元(普及)し、本市の幼児教育の質の向上と研究員並びに所属幼稚園、保育園の教職員等の教育力向上に努めます。

■「ＥＳＤとは？」

「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development）の略称。環境、人権、健康福祉、多文化共生、まちづくりなどをテーマとして、NGO・NPO、学校、企業などが行う持続可能な社会づくりに向けた人づくり、一言で言えば、持続可能な社会の担い手を育む教育のことです。

国際的な流れとしては、地球環境問題、貧困、紛争などさまざまな課題を解決するためには人づくりが重要として、2002年のヨハネスブルグサミットにおいて日本が「持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」を提案し、同年の国連総会にて、2005年から2014年までの10年間をESDの10年とする旨の決議案が提出され、満場一致で採択されました。これを受け、現在ESDは各国で進められています。日本では、2006年3月に政府が実施計画を策定しスタートしました。

教育の現場では、2008年実施となった幼稚園教育要領・保育所保育指針及び小学校・中学校学習指導要領、2009年の高校の学習指導要領には、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれ、こうした考え方を基本とした教育が現場に求められています。

１　幼児期の教育にＥＳＤの考え方を導入するにあたって

乳幼児期は、生きる力の基礎が培われるきわめて重要な時期です。少子化が進み、家庭や地域の子育て力の低下が指摘される中で、保育所・幼稚園への期待が高まり、質の高い養護と教育の機能が強く求められています。子どもたちに生きる力を養うためには、直接的･具体的な体験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力等を育み、社会とかかわる人として生きていくための基礎を培うことが大切です。そのことから、持続可能な社会に向けて育みたい力を視点にワークショップを行います。また、年齢や発達の特徴に応じたその時期に育てたい力を保育所・幼稚園の視察等もしながら図式化します。そして、実践事例の具体を通して検証し、育てたい力を育む過程(プロセス)の上にたって研究を進めます。

２　平成２３年度の研究の内容

（１）ワークショップより

①振り返り：自分自身の自然・社会・人とのつながりについて考える。

②現在の乳幼児の実態を踏まえ、持続可能な社会に向けて育みたい力とは何か、自分たちの実践を通して考える。

③年齢別に育みたい力を考える。

（２）地域で育てる･･･甲子園浜小学校の先進的な幼・保・小連携の取り組みの実践報告から学ぶ。

３　成果と課題

〈　成果　〉

○保育所保育士･幼稚園教諭が「西宮市公立保育所保育課程」「西宮市立幼稚園教育課程の基底」等を参考にし、同じ場で討議することを通して、乳幼児保育･教育について相互理解を図ることができました。

○個々の実践を通して、人と人がつながる原点や人を受容することや信頼関係を築くための基本である愛着関係を培っていることが重要です。そのベースの上に子どもたちは育つとの認識を深めることができました。

○「持続発展教育（ESD）」という聞き慣れない言葉ではあるが、今まで幼児教育が大切にしてきた心情・意欲・態度を育てる事であり、それが人間形成にいかに重要であるか実践を通して再確認できました。

〈　課題　〉

○発達や年齢に応じた育てたい力を明確にし、その時期を逃さず積み残しがないように意識して保育を進めていくためには、育てたい力のプロセスを図式化し、「持続発展教育（ESD）」の考え方を共有することが必要だと考えます。

■平成23年度　研究メンバー

研究指導員
　阿部　久美　教　頭（今津幼稚園　現西宮市立夙川幼稚園）
　大澤　雅代　副保育所長（高須西保育所）
研究員　福田　陽子　教　諭（大社幼稚園）
　野村　美穂　教　諭（上ヶ原幼稚園）
　荻野　明子　教　諭（南甲子園幼稚園）
　田中　紀子　保育士（小松朝日保育所）
　厚見　昭洋　保育士（学文殿保育所）
　粕谷　早紀　保育士（瓦木北保育所）
特別研究指導員
　小川　雅由　氏（NPO法人こども環境活動支援協会事務局長）

４　平成２４年度への方向

○具体的な実践を通した研究に重点を置き、資料としてまとめ、保育･教育内容の充実に向けて、活用できるようにします。

（１）育てたい力のプロセスを図式化

（２）保育所視察

（３）実践事例の作成

第１回　ESDの概念についての講義（H23.6月3日）↑

第２回　「自分と自然体験、社会とのつながり」について
ワークショップ（H23.8月2日）

第３回　「育みたい力」について自己チェックを行い、幼児教育に携わる職員に求められる力は何かを考えた（H23.8月26日）

第４回　甲子園浜小学校での「幼・保・小連携」について↑
事例提供：宮井和子校長（H23.10月20日）

第５回　0歳から2歳対象にESDをどのようにすすめればよいのか、どのような力を育てればよいのか（H23.12月20日）

第６回　3歳から5歳対象にESDをどのようにすすめればよいのか、どのような力を育てればよいのか（H24.1月11日）↑

第７回　「育みたい力」について、各自の意見を出し合う↑
（H24.3月21日）

子どもの発達過程

0歳から5歳までの保育

この「子どもたちの発達過程の概要」は、０歳から５歳までの子どもたちの発達段階や保育所・幼稚園における保育現場での様子などについて、研究会メンバーの中で共通認識を持つため、各メンバーからの報告を受け全員で協議したものをまとめたものです。

【保育所の特性】

保育所は、専門性を有する職員が家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としています。専門性を有する職員とは、保育士だけでなく、保育に携わるすべての保育所職員のことで、調理員、栄養士、保健師等を指します。そして、保育は保護者と共に子どもを育てる営みであり、子どもの24時間の生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携を密にして行っています。

［子どもの24時間の生活を視野に入れる］

常に、子どもの24時間の生活の中に保育所の生活があるということを意識して保育をしています。子どもの家庭での生活と保育所の生活が途切れることがないように、また、保護者の方に安心していただけるように、個人連絡表があります。そこで、家庭との連携を密にして、子ども一人一人の生活のリズムをしっかりと把握し、安心して生活できるように努めています。

［あるがままを受け入れる］

保育士は、子どもの体の発育面と共に、心の育ちにも充分に目を向け、一人一人の存在を認めていくことが大切です。子どもはあるがままの自分を受け入れてもらえることの心地よさを味わい、大人への信頼を拠りどころとして、心の土台となる個性豊かな自我を形成していきます。そして、愛されていることを感じることで人を愛せるようになると考えています。このように、子どもの傍らにいる大人が子どもの心をしっかりと受け止め、相互的なやりとりを重ねながら、子どもの育ちを見通して援助していくことが大切です。

［家庭との連携］

保護者の声に耳を傾け、その意向をしっかり受け止めた上で、職員間で連携を図りながら対応していますが、常に、「子どもの最善の利益」を考えて、取り組むように努めています。また、日頃より、保育の内容や取り組みについて説明したり、丁寧に伝えながら保護者と共に考えたり、話し合ったりすることを大切にしています。

そして、日々の保育をすすめ、それを通して、子どもはもとより、保護者も、そして保育士も育ち合っているのが保育の場であると考えています。

■０歳児クラス

抵抗力が弱く、感染症等の病気にかかりやすい乳児の環境には、最大限の注意を払っています。特に生後57日からの産休明け保育については、生命の維持と情緒の安定に配慮した細やかな保育が欠かせません。

また、SIDS(乳幼児突然死症候群)に対しても、うつ伏せ寝を避け、睡眠時に布団とベットのマットの間にセンサーマットを敷き、室温の調節、呼吸の状態、顔色等細部に渡り、チェック表を利用して、複数の保育士の目で見て、乳児の様子を観察把握することに努めています。

０歳児の保育では、特定の保育士が一対一でかかわれるように心がけ、一人一人のリズムに合わせて、心地よく過ごすことが出来るように保育士間で連絡を取り合っています。また、子ども一人一人の声やしぐさや動きなどを介して発する欲求を察知し、タイミングよく応えていきます。そして、「声を出したときには、優しく受け止め、応答する。」「毎日、スキンシップを図り、子どもが安心できるようにする。」「いつもと違う様子はないか気をつける。」など子ども一人一人を丁寧に見ていくことを大切にしています。

乳児の主体性を考えるときに、特定の保育士との親密な関わりにおいて育まれる子どもと大人の信頼関係が、子どもが主体的に環境に係わる基礎となります。例えば、食事をスプーンで食べさせてもらう場面で、安心できる保育士が、スプーンを口の前まで持っていくと、子どもが前かがみになり、口をスプーンに近づけてくる姿が見られるなど、子どもがその行為に参加する姿勢が大切と考えています。そして、そのことがいずれ、食べたいものを指差したり、つっついたり、つまもうとしたりする姿へとつながります。

■１歳児クラス

この時期の子どもの発達の大きな特徴の一つは歩行の開始です。歩行の獲得は、自分の意志で自分の体を動かすことが出来るようになることであり、子どもは「自分でしたい」という欲求を生活のあらゆる場面において発揮します。反面、「いや」と言う事も増え、保育士との信頼関係はより重要となります。また、保育は複数の保育士で行っていますので、子ども一人一人の細かいことについては担任保育士全員が把握し、保育士の援助や対応が同じになるように、保育士間の連携は欠かせません。

■２歳児クラス

信頼できる保育士の関わりをもとに、友達とのかかわりがより増えます。行動範囲が広がり、自我の育ちの表れとして、「自分で」「いや」と強く自己主張する姿が見られます。保育士がこのような自我の育ちを積極的に受け止めることにより、子どもは自分へ自信をもつようになります。しかし、自分の行動の全てが受け入れられることではないことに徐々に気付きます。子どもは、自分のことを信じ、見守ってくれる保育士の存在によって、時間をかけて自分の感情を鎮め、気持ちを立て直していきます。

■３，４，５歳児クラス

子どもの主体的な活動を育む保育を行うために、年齢の枠をはずす形態を取っています。年齢の枠をはずしていますが、それぞれの年齢の発達を保育士が熟知し、しっかりと抑えていきながら保育を進めています。

また、３，４，５歳児担任保育士が、子ども一人一人の姿を共通理解、認識して同じように援助できるように話し合いをもち、連携をしながら保育を進めています。

【発達過程で大切にしていること】

子どもの成長は、その時々に必要な要素が積み上がっていくものと考えています。保育所・幼稚園で年齢別で育てたいこととしておおむね書き記しましたが、子どもの発達を年齢で画一的に捉えるのではなく、発達のプロセスを大切にしたいと考えています。

子どもの育つ道筋やその特徴を踏まえ、発達の個人差に留意し、丁寧に対応することが大切で、年齢に応じた発達の課題の「積み残し」は成長に大きく影響するので、発達過程の中で「積み残し」をしないようにしていくことが重要です。

【幼稚園の特性】

幼児は、それぞれの家庭や地域で得た、生活経験を基にして幼稚園生活で様々な活動を展開し、また、幼稚園生活で得た経験を家庭や地域での生活に活かし、相互に循環するような密接な関連をもっています。

また、担任はもとより、いろいろな活動の場面において教職員が一人一人の子ども理解に努め、子どもの多面性を見ていくことを大切にしています。

■４歳児

入園間もない幼児は、新たな生活の広がりに対して、期待と同時に不安や緊張も抱いています。教師を心のよりどころとして、自分の居場所を見つけ、次第に安定して過ごせるようになっていきます。そして、遊びを中心とした生活の中で、友達とかかわり、いろいろな活動において友達とやりとりする中で、他者を意識することと併せて自分自身のことも少しずつ客観的にわかるようになり、自己を確立していきます。また、発達から考えても、幼児期における基本的生活習慣の確立は重要です。

しかし、家庭生活と幼稚園生活とが異なることから、入園当初は戸惑いが大きいので、一人一人の幼児の実情に合わせた援助をしていくことが大切になります。友達とのかかわりが深まると、友達の行う姿を見たり、一緒に行ったりすることや家庭との連携を図ることで、生活に必要な様々な行動が徐々に身に付くようになっていきます。

■５歳児

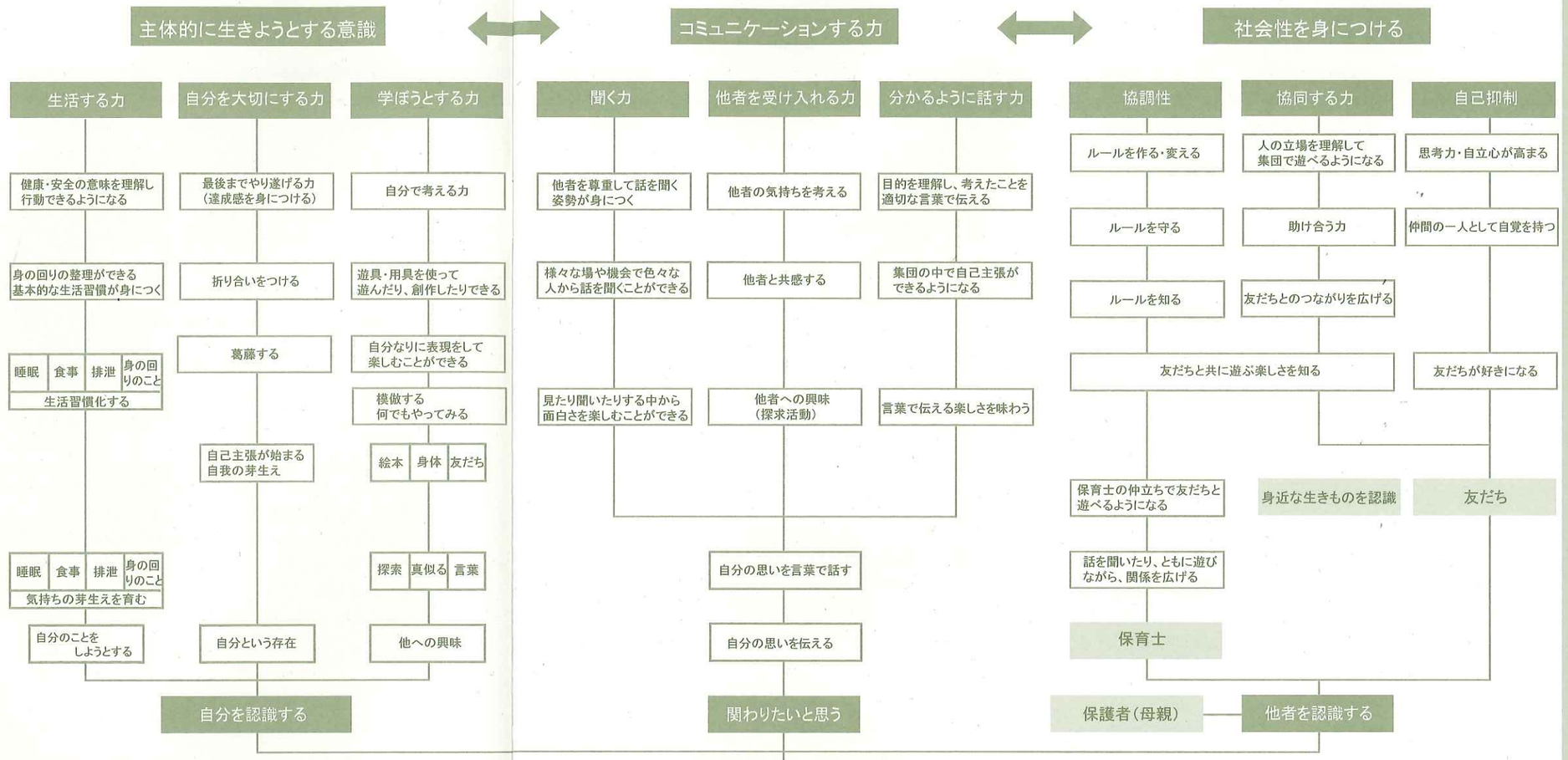
この時期になると、遊び方が多様になって、友達関係が深まっていきます。それぞれの自己主張も強くなって、自分の思いや考えが友達と違うことでぶつかり、葛藤体験を味わうようになります。この自己主張と自己抑制のバランスがより豊かな人とのかかわりを深めることにつながります。

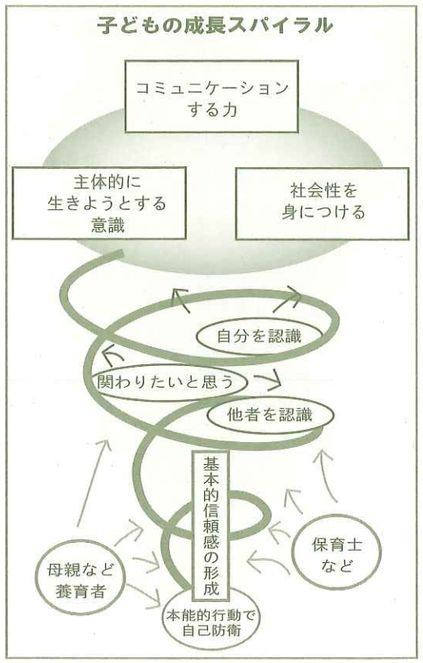
そして、自分たちで遊びを考え合ったり、ルールを作ったりして、守って遊ぶことの楽しさを味わい、共通の目的に向かって遊びを実現するために工夫をすることもできるようになります。その中で、友達の良さを認めたり、自分の思いや考えを表現したりする言葉も豊かになっていきます。

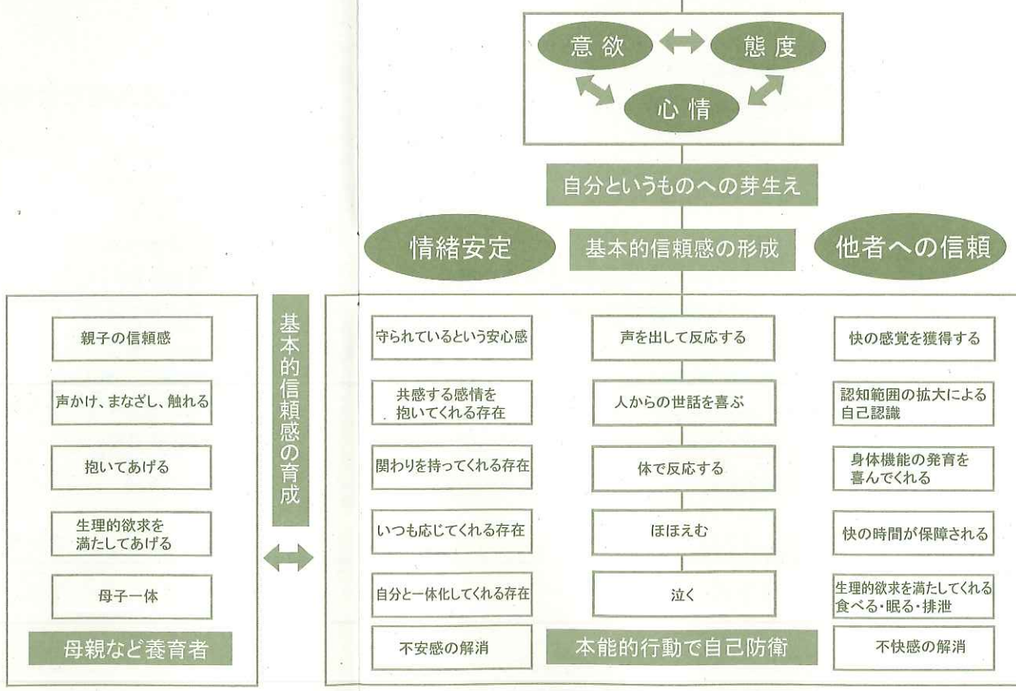
このように、みんなでルールを決め、遊びを創るという行動は、「対話」の中でよりよい方向を「選択」していくというＥＳＤの考え方そのものです。

乳幼児期におけるESD　（育みたい力に関する中間整理）

年齢	言葉	動作
5歳		人の役に立てると喜ぶ なぞなぞ遊びをする ひもの方結びをする
	ひらがなで書かれた自分の名前を読む	協同遊びが多くなる
	汚い言葉を使う事もある 昨日のことを話す	年下の子どもの世話をしようとする スキップをする
4歳		
		片足ケンケンをする
	日常のあいさつ（おはよう　ありがとう）	ごっこ遊びが盛んになる
3歳	質問が多くなる 同年齢で会話する	オシッコを事前に知らせる
		平行遊びが多い
2歳	語彙の急激な増加	歩く、走る、跳ぶの基本的な運動機能 指先の機能の発達が見られる
	2語文を言う	オシッコをした後に知らせる
1歳6ヵ月	言語が増えてくる	ボールを投げる ズボンをぬぐ 走る
	1語文を言う	名前を呼ばれると返事をする
1歳2ヵ月	意味のある単語を話す	一人で歩く
		物をほる
12ヵ月	音をまねて言う	一人で立つ 伝い歩き
10ヵ月	簡単な言葉が分かる	小さい物をつまむ
9ヵ月		つかまり立ち はいはい
8ヵ月	人見知り 名前を呼ぶと見る	
		おすわりができる
6ヵ月	喃語が増加	寝返り 手から手へ持ち替えることが出来る
		物に手を伸ばす
4ヵ月	あやすと喜ぶ	
		うつぶせで頭を上げる
3ヵ月	あやすと声を出す	首が据わる 手に触った物をつかむ 目で動く物を追う
2ヵ月	初期喃語 あやすと笑う	音に反応して手足動かす
誕生		







この「育みたい力に関する中間整理」は、「主体的に生きようとする意識（心情）」「コミュニケーションする力（意欲）」「社会性を身につける（態度）」の３つにしぼり、子どもたちがこれらの「力」に向けて育つために、０歳からの６年間で大切にしたい「関わり」を体系的にまとめたものです。

この中で、８ヵ月までの乳児期については、子どもの基本的信頼感を形成する上での保護者や保育士など大人の関わりが極めて重要となることを示しています。

共同研究「乳幼児期とＥＳＤ」に参加して

共同研究を始めた当初、日々の保育実践とは無縁なものとして受け止めていたESDが、１年間の活動を行っていく中でESDが求めている「育みたい力」とは、保育所や幼稚園で日常的に考え、実践している内容そのものであることを理解できるようになりました。各研究メンバーの１年間の感想やESDについて考えたことをまとめていただきました。

ＥＳＤマインドをもつ教師を目指して

子育て総合センター　　河﨑　祥子

持続発展教育（ESD）では、「持続可能な社会の実現をめざす」ため人育てをどのようにしていくことが必要なのかが大きな課題となっています。人間として基礎の部分を培う乳幼児期をどのように育てていくことが望ましいのか、生活(地域)が子どもを育てていく時代ではなくなった今を生きる子どもたちに、私たちはこの時代にふさわしい教育を考えていかなければなりません。

確かに親が親としての心構えや姿勢をしっかりもってもらうことを指導することも必要ではありますが、赤ちゃんに触れる体験がないまま親になった、孤立状態の育児であるなど、今日の家庭の育児事情とその背景を知るとそのことだけを取り上げるのではなく、乳幼児期を幼稚園等の施設で過ごす子どもたちに多様な経験を積み重ねさせることが自主性を育て、豊かな人間関係を築くことなど子どもの育ちにつながってくると考え、教育していくことが望まれます。

そこで幼稚園等の施設の子どもの実態や地域の実情を踏まえ、地域の環境を活かし、生きものや動植物などの自然環境の出会いを大切にし、新しい発見や心を揺さぶる感動体験を経験していくことで、豊かな感性(五感・五官)を育てていくことができます。又、幼児は友達と協同して遊ぶことを通して、「自己の世界」から「他者と関わる世界」へと物の見方や考え方、人間関係を広げて新しい価値観に触れていくので、自己発揮や葛藤やつまずきや共感など幼児の発達に必要な体験を積み重ねられるように保育内容を見直し、実践することが大切です。そのことは、友達と対等の関係性が築けるような自己主張と自己抑制のバランスを保ち、コミュニケーション能力を育てていくこととなります。

そのためには、日々の保育で今子どもに何を育てていくのかを意識して実践できるように年間カリキュラムを作成し、乳幼児期における持続発展教育の年齢に応じたねらいを明確にした保育実践をおこない、保育の充実を図ることが求められます。

ＥＳＤの理念を幼児教育に生かすには

西宮市立今津幼稚園　阿部　久美
（現 西宮市立夙川幼稚園）

今回の研修を通して、ESDは決して目新しい教育ではなく今まで幼児教育が大事にしてきた心情、意欲、態度を育てることであり、それが人間形成においていかに重要であるかを再確認することができました。そのために、私たちはESDで育てたい力をしっかりと見据え共通理解した上で、乳幼児期の発達を見直し、その発達の節目をきっちりと越えていけるような保育活動をしていかなければなりません。子どもの発達を保障するために、それにふさわしい教育活動をどのように展開していくか、環境構成や援助はどうあるべきか等、ESDに掲げる育てたい力を意識しながら検討していくことが必要です。

■原体験を保証する

地域や人とのつながりが希薄になった現代を生きる子どもたちだからこそ、保育所や幼稚園で様々な人と関わり、様々な体験をさせなくてはならないのです。それには遊びの中で、自分で選択したり、試したり、失敗したり、最後までがんばったり、自分の思い伝えたり、友だちの気持ちに気付いたり、という様々な原体験ができる教育の場を保障することが大切です。情緒の安定、他者への信頼、自己肯定感を乳幼児期に獲得した子どもは、将来どのような社会においてもたくましく、人とつながり生きていくことができるだろうと考えています。

■子どものモデルは大人

また、幼児にとって先生や親といった身近な大人は絶対的なモデルです。幼児教育は親教育の場とも言われています。親の意識や行動を変えていくことが次世代である子どもの生き方を決めていきます。今の子どもや親の実態を正しく把握し、そのために保育所や幼稚園といった教育機関はどのような手立てをしていくのか、自分にできることは何か、保護者と一緒にできることは何かを考えて子どもの将来のために有意義な活動に取り組んでいきたいと思います。

「子どもの最善の利益」を守るために　私が発信すること

高須西保育所　大澤　雅代

保育所に入所する子どもの育ちを支える保育所の役割は、「子どもの最善の利益」を考慮し、保育所そのものが「最もふさわしい生活の場」でなければならないということが保育所保育指針で明確に示されました。そして、保育所保育指針の第１章総則の保育原理に「保育所保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」とあり、持続発展教育（ESD）の「生きる力を育む」ということそのものであると思います。私達が日々行っている保育の質を高め、子ども一人一人の就学後、或いは子どもが大人になる未来を見据えてつなげられるような保育に努めることが、幼児期のESDをすすめ、私達大人がやらなければならないことと強く感じています。

そこで、この乳幼児期の子どもにどのような力をつけたいかと具体的に考えたとき、「人とかかわる力」「生活する力」「学びの芽」が大切ではないかと思います。

■人とかかわる力

「人とかかわる力」とは人間関係の基礎をしっかり育てるということです。おおむね６ヵ月未満の子どもからおおむね６歳の子どもが生活している保育所では、十分に養護の行き届いた環境の下、特定の大人が親密なかかわりを繰り返し持つことで信頼関係を築き、その大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともにまわりの人への信頼感が育ちます。そして、次第に自我が芽生え、また、大人との信頼関係を基にして友達への関心が高まり、一緒に遊ぶことを喜ぶようになります。成長するにつれ、友達との様々なかかわりの中でぶつかり合いなどの経験を通して友達への思いやりの気持ちを持ち始め、自分の意見も言うが友達の話も聞けるようになります。このように、一人一人の成長が集団の中で発揮出来、集団の中で生かされ、お互いの存在や良さを認め合えるような集団の育ちへつなげていくことが大切と考えています。

「にんじん、つまめるかな～」

■生活する力

「生活する力」は子どもに基本的な生活習慣が身につくように育てることです。子どもは安心できる大人との関係の下、大人の養護的なかかわりやその姿を通して、望ましい生活の仕方や習慣・態度を徐々に体得していきます。ですから、大人は子どもの見本となるように常に自分自身や自分の保育を振り返り、省察することが大切と考えています。

■学びの芽

「学びの芽」とは保育所における教育的側面で、子どもが大人の援助により環境との相互作用を通して、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度を身につけていくことです。「望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」ため、大人は子どもの将来を見据え、願いをこめて自らの経験を受け渡していく営みであるともいえます。この視点を持ちながら、大人が一方的に働きかけるのではなく、子ども一人ひとりの存在を受け止め、その育ち行く姿を見守り、大人の温かな視線や子どもへの信頼が子どもの意欲や主体性を育んでいくと考えています。

そして、保育は保護者と共に子どもを育てる営みであり、子どもの24時間の生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携を密にして行わなければならず、保育所での保育がより積極的に乳幼児期の子どもの育ちを支え、保護者の養育力の向上につながるよう保育所の特性を生かした支援をすることが大切と考えています。

以上、3点の育てたい力をつけるために、私は保育の指導に当たるという自分の立場を意識し、チームとしての保育を大事にし、保育課程に基づく保育の経過や結果を省察、評価反省し、保育の質を高められるように努めていきたいと思います。

幼児期のＥＳＤで大切にしたいこと

西宮市立大社幼稚園　福田　陽子

持続発展教育（ESD）という言葉をこの研究会で始めて知りました。ESDとは、『持続可能な社会の担い手を育むための教育』であると聞き、新鮮な思いでこの言葉を受け止めました。幼稚園では、「なかよしカード」などを用いて『ものを大切にしよう』という取り組みはしてきましたが、それ以上のことについては、意外にあまり知らないのだということに気づきました。ワークショップを通して、自分自身についてや、人・社会とのかかわりについて探ったり、各年齢別の保育について学び分かち合ったりしながら、少しずつ持続発展教育（ESD）にアプローチしていった一年だったように思います。

■自分の存在を肯定することから始まる

幼児期のESDとは何か…自分の中では、まだまだその入り口にさしかかったばかりで、その答えが見つからないといったところが正直な思いですが、私なりに感じたことは、『人や自然や社会と調和し、持続して社会の担い手となる人材の育成には、根底に、健全な自己肯定感が欠かせないのではないか』ということです。自分を大切にできて初めて、人や自然や社会などの他者を大切にできます。自分の存在を肯定できていると、人や自然、社会を健全に受け止め、理解し調和することができ、前向きに、発展的に歩んでいけるように思います。０歳児から６歳児までの保育を分かち合いながら、保育士も教師も日々、“個“の子どもの存在を大切に受け止めて信頼関係を育み、子どもが自己肯定感を持って健全に育ち、他者や環境と良い関係を築いていけるよう見守り援助しているということは共通しているのではないかと思いました。

乳児期を担当する保育士が、あるがままの姿をそのまま受容し、愛情を注ぐことに心を配ることから始まり、子どもの成長に従って、具体的な見守りや援助の方法は変わりますが、その根底にあるものは同じではないかと感じました。物質的には豊かであり、恵まれているといえる日本ですが、今、どれくらいの子どもたちが自己肯定感を持ち、未来に希望を持って生きているのでしょうか。そんな子どもが増えれば増えるほど、ESDという言葉がもっと身近になるような気がします。

乳幼児期におけるＥＳＤについて

西宮市立上ヶ原幼稚園　野村　美穂

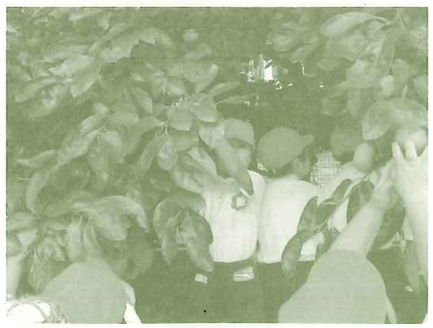
乳幼児期は生きることのすべての基礎や土台となる力を育む大切な時期であると思います。乳幼児期においてのESDとは、子ども達が成長し大人になり、やがて社会に出る時に身につけておきたい持続発展する為の力や考え方などを、0歳の段階から少しずつ積み残しがないようにしていくことではないかと思います。

保育所や幼稚園の現場において、まず意識しなければいけないことは家庭とのつながりが密接に関係するということだと思います。生まれた子どもが生命を維持し、健康で安定して過ごせるように十分配慮しながら、子ども自身との信頼関係を結び、これから育まれるいろいろな能力や行動の入り口を開いていくことが重要であると感じます。それと同時に保護者も支えながら家庭と連携して子どもに関わっていくことが大切であると思います。自分でできることが増え、自我が出たり他者とのかかわりが増えたりしていく過程の中で、子どもたち一人一人をしっかりと受け入れ、発達の段階を見通して今教師のどんな関わりや援助が必要なのかということを考えて子ども達と接していけるようにしていかなければならないと思います。人とのかかわりだけではなく、ものや自然など周りの環境にも興味を広げられるように教師が意識をもつことも必要であると思います。

■生きるための基礎的な力をつける

幼稚園においては、入園の時にはそれまでの生活や経験に個人差があることをきちんと把握し、個人の発達と自立、集団としての育ちを積み上げ、基礎、土台をしっかりと作っていくことが大切であると思いました。

ESDを研究していく中で、子ども達に育みたい力を考えた時に、やはりすべての始まりは生きるための基礎的な力をしっかりとつけてその上に人間関係、環境、地域や社会とのつながりなどの世界が広がり、かかわりながら力が育っていくのではないかと思います。まだまだ勉強不足ではありますが、乳幼児期から長く続いていくものであることを踏まえながら、今何ができるか、必要なのかを考えていきたいと思います。



園庭で柿もぎをする子どもたち

ＥＳＤを幼児教育の視点から考える

西宮市立南甲子園幼稚園　荻野　明子

持続発展教育（ESD）の目的を知っていくうちに、これから益々広がる国際社会に生きる子ども達にとって、今後どのような力をつけていかなければならないかということを、教育に携わる私たちは、より広い視野で考えていかなければならないと思うようになりました。以下、ESDの持続可能な社会を構築するための４点の考え方を、自分なりに幼児教育の視点から考えました。

１「問題意識をもつ」

幼児期は、遊びを工夫する力を育むために、想像力を豊かにし、思考力の芽生えを養う援助が大切だと思います。特に、一人一人が自分の思ったことや感じたことを言葉や身体で表現する楽しさを味わわせたいと考えます。２年間継続したねらいが必要ですが、特に入園当初は大切にしています。

また、生き物や植物などの自然環境は、子ども達にとって新しい発見や感動の出会いであり、自分とは違う他者への気づきの一歩になります。植物を見つけたい、生き物を触りたいなどの思いから、自分から発信する楽しさを味わうことができます。また、集団生活では、友達との共通体験ができることも大きいことです。

２「取り組む課題について考える」

自分の考えを身体や言葉で表現する中で、友達の考えにふれ、自分とは違う新しい価値観に出会うことができます。そこで、相手との考えの違いに気づくことが大切です。

３「課題と自分のつながりを考え、理解する」

相手の考えを知っても、自分の思いを通したり納得できなかったりしてトラブルが起きます。このトラブルで子ども達は様々な葛藤などの感情を知り、自分なりに折り合いをつけていったり、意見交換をしたりすることを学びます。ここで、聴く力を育てていきたいと思います。

４「問題、課題解決のために人と意見を交わし、共にあるべき方向を確認し、行動する」

これは、３の上につながり、言葉による伝え合いや、自分たちでルールを作り出し守って遊ぶなど、コミュニケーション力の育ちです。年長児にはこの力を特につけたいと考えます。

以上から、持続可能な社会の発展を見据えた教育の中で、幼児期においては、自分の気持ちを身体や言葉で表現する力をもつこと。そして、友達とのつながりの中で、話す力、聴く力を養い、コミュニケーション力を育むことが大切であると考えます。また、幼児期に様々な人とふれあえるように配慮し、人が好き、人とかかわりたいと思える子どもにさせたいと思います。

園庭でお芋掘りをする

花壇にいる生きもの、ダンゴムシに夢中になる子どもたち

乳幼児期に大切にしたいこと

西宮市立小松朝日保育所　　田中　紀子

「ESD」は初めて耳にする言葉でした。どのように研究をすすめていくのか、初めは不安だらけでした。

私たちのまわりにある様々な問題をまず自分がどのように考えていくか、自分自身を振り返ったり、自分の考えを出し合ったりする中で「自分と自然」「自分と社会」「自分とまわりの人々」ということについて考えるきっかけになりました。

■身につけたい力を積み上げていく

「小学校6年間で身につけたい力」の表を見たときに、幼児期からのつながりの大切さを強く感じました。そしてその中でもやはり乳児期がその後の成長の基盤になるということで、乳児保育の大切さを改めて感じています。「原点を見ずして良い教育はできない」という言葉が印象的でしたが、乳幼児期が土台となり、その上に各年齢での身につけたい力が積みあがっていくということを理論的に考え、少しずつ整理をしていきたいと思っています。

何よりも一人一人あるがままを受け止めてもらい、愛されているという安心感、自尊感情を育てることが原点になります。そして人間関係が広がり、集団で生活する中で親以外の人との関わりも増えてきます。年齢があがるにつれ、自他の区別がつくようになり、5歳児にもなると自分を客観視し、まわりの人のことも考えられるようになってきます。その中で他人まかせでも批判しあうばかりでもなく、自分自身のこととして考える主体性、さらに「こうしていこう」という新しいものを生み出す力や意欲が育つような援助を工夫していく必要性を感じました。

何もせず結果的にそうなるのと、そのように育ってほしいという思いやねらいをしっかりと持った結果そうなるのとでは全然違ってくるので、やはり私たち子どもに関わる大人がそのことを意識することの大切さも感じました。そして乳幼児期に関わる一人として、役割・責任の大きさをひしひしと感じ、まずは自分から気付きや学びのアンテナをしっかりはりめぐらしていきたいと思います。

「じぶんではけたよ」

「おはなしみようね」

「ぴかぴかだんごができたね」

ＥＳＤで育みたい力の基礎とは

学文殿保育所　　厚見　昭洋

自分と社会のつながりはどんな時か考えたり、持続可能な社会に向けた育みたい力として自分自身に不足している力をチェックしたり、小学校へ行くにあたって必要な力とは何か話を聞いたり、一年間様々な角度からESDを学んできました。

自分自身ESDをどう感じたか、世の中にある、環境問題や貧困や平和など様々な問題について、他人事と感じるのではなく、まず自分の問題として捉え、そして、その問題の解決に向けてどうするべきか考え、人と協力して行動できる人間を育てるのがESDではないか、と捉えています。そういった様々な問題を解決するのに必要な力としては、問題意識を持つことや人と解決策を考えることなど、さらにそういった力を得るには知識や協調性、人と関わるコミュニケーション能力などで、そして更にその力を得るには探究心や人の気持ちを考えられる力などで、その原点には、信頼感や自分が愛されていると思えること、といったように乳児期で得た力が、その先にある大きな問題を解決できる人間を育てることにつながっていっているのだと思いました。また、保育所でも行っているように、年齢関係なくすべての子どもの思いを受けとめ、安心感や信頼感、愛されてると思える気持ちを育てることの大切さを改めて感じることができました。

■大人が共通認識を持つことが重要

公立保育所でも、自分で考え、行動し、自ら関わっていける、生きる力を持った、主体的な子どもを育てるための主体的な保育を行っています。まさしく、乳幼児期のESDではないかと思われます。しかし、こういった保育を行っているにも関わらず、自分たちが行っている保育が将来的にどういった大人を育てることにつながっているのか、自分を含め深く考えずに保育している者が多いと思われます。話し合いでもあったように、何のために今の保育をしているか理解し意識することで見えてくるものも違ってくるし、子ども自身の意識も違ってくると思います。今までの流れでしていたり、感覚でしているものを、しっかりと理解し、職員間で共通認識することが重要になってくると感じています。

未来を担う子ども達に育みたいこと

西宮市立瓦木北保育所　　粕谷　早紀

今回の幼児教育研修に参加するまでESD(持続発展教育)という言葉を耳にしたことがありませんでした。ESDを進めていくにあたり他の先生方と様々な意見を交わす中で、新たな気づきを持つことができました。

初めESDは何か日頃の保育とはかけ離れているような印象がありました。しかし、幼児期におけるESDとはどのようなものかということを考えていくにあたり0歳から5歳までの子どもの成長発達をもとに、各年齢で育みたい力を考えていった時に日々の保育そのものが幼児期の子ども達のESDにつながるのではないかと感じました。

■信頼関係を築く大切さ

乳児期にはあるがままの自分を十分に受け入れてもらうことで安心して自我を出せるようになること、また“自分で”という気持ちが芽生えてきた時には“やってみよう”という気持ちを認めてもらうことで意欲につながること、自分を十分に認めてもらうことで安心感が得られれば愛されていることを感じ、成長していくにつれ人のことも愛されるようになるということ等がESDの一番基礎となるのではないかと感じました。受容することや信頼関係を築く大切さにも改めて気づきました。

幼児期には、友達との関わりも増えてくることで葛藤したり思いがうまく伝わらなかったり、子ども自身がいろんな壁にぶつかりながらも友達に思いを伝え、また友達の思いにも気づくように保育士が仲立ちをすることが対話をする力の基盤になるということも実感しました。

日々の生活や遊びの中で子ども自身が様々な問題に気づき、それらを解決するために友達と対話していく力をつけることが幼児期の子ども達のESDにつながるのではないかと思いました。そのためには、保育士等や大人が時には仲間として子どもの中に入り、時には一歩引いた所から様子を見守ったりと子ども同士の関わりやつながりを深めていくことも必要であると思いました。

この一年の研修を通して、子ども自身がそのような力を育めるように、私自身はどのように子どもと向き合うべきなのかを考える機会となりました。私自身の気づきや再認識したことを保育の中に返していくことができるようにしたいと思います。

小学校新任教員研修でまとめた ＥＳＤ「育みたい力」とは

ワークショップで各学年の「育みたい力」を考える

この度の乳幼児期におけるESDを考える研究会において、子どもたちの次の成長の場となる小学校ではどのような「力」を育みたいと考えているかについて一つの事例を紹介します。

この事例は、当協会が西宮市教育委員会からの依頼を受け行った平成23年度西宮市新任教員対象の環境教育研修におけるESDをテーマとしたワークショップでまとめられたものです。小学校の各学年においてESDをどのように進めればよいか。また、その中でどのような「力」を育みたいかをグループワークで検討してもらいました。

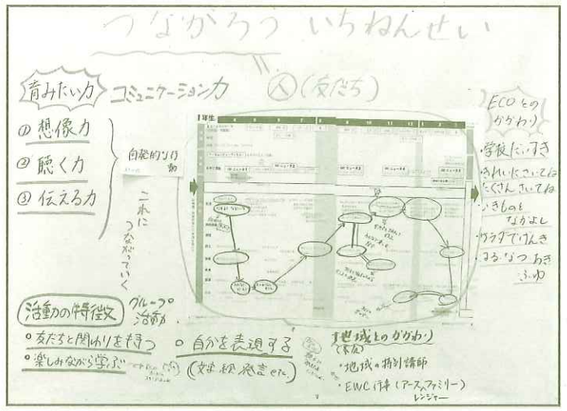
新任教員の人数が多いことから2つのグループ（各30名）に分けて同様の研修を行い、1年生から6年生までの各学年の発達段階に応じた「育みたい力」を個人ごとに考え、さらに各学年で3つにしぼりました。そして、その「力」を育てるためにどのような年間授業計画を立てればよいかを模造紙にまとめて発表してもらいました。

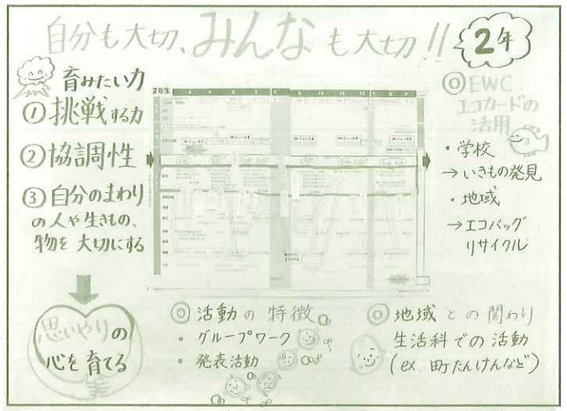
この際に重要なことは、自分たちが担当する学年の子どもたちは前の学年でどのような実践を通じてどのような「力」を付けてきているかを理解しておくことが求められますし、これらを学校内で保障するしくみが必要となります。

研修を受けた大半の教員は、現場経験が半年ほどであるため、長年の経験に基づいた考え方や授業計画の組み立てが出来る訳ではありませんが、教育に携わりたいという熱い思いの中から、実直に子どもたちの成長を願う気持ちでグループワークを行ってくれました。以下、新任教員がまとめたESDを進める中での「育みたい力」や年間事業計画の一部をご紹介します。

小学校6年間で育みたい力（グループ１）

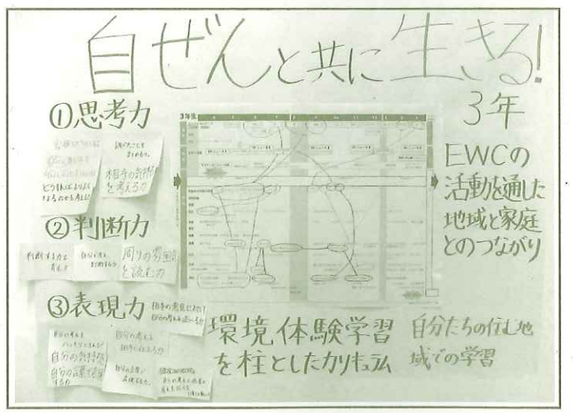
学年	育みたい力	学年テーマ
1	・生きものを大切にする力 ・伝える力 ・知識を生かす力	ESD元年
2	・自分の思いを伝える力 ・命を大切にする心 ・相手の思いに気づく力	みんなとつながる 2年生！
3	・気づく力 ・調べる力 ・比べる力	ひとりじゃないよ
4	・自己表現 ・他者理解 ・郷土愛	知ろう！自分と 地域の関わり
5	・自然と共存 ・危機対応 ・社会的未来志向	未来を見据える 5年生
6	・コミュニケーション ・国際理解する力 ・合理的意思決定力	自分を見つめ直し 世界に目を向ける

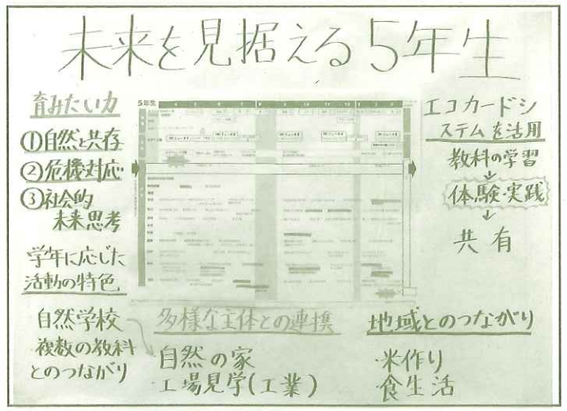


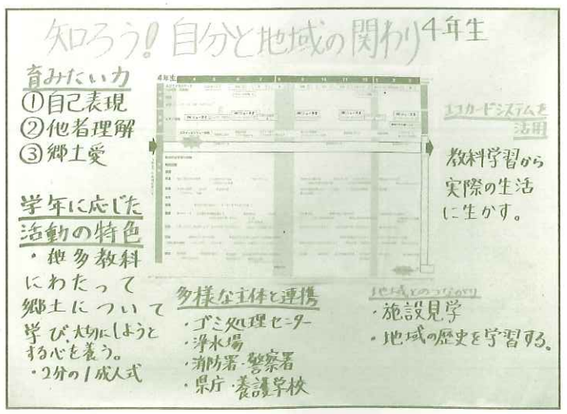


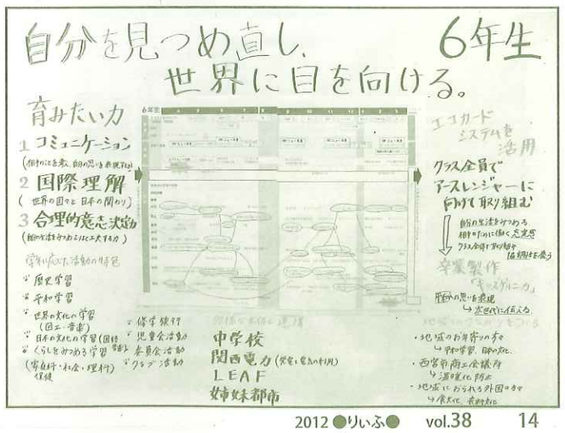
小学校6年間で育みたい力（グループ２）

学年	育みたい力	学年テーマ
1	・創造力 ・聴く力 ・伝える力 ・コミュニケーション力	つながろう いちねんせい
2	・挑戦する力 ・協調性 ・自分の周りの人や生き物を大切にする	自分も大切 みんなも大切
3	・思考力 ・判断力 ・表現力	自然とともに生きる
4	・表現力 ・認め合う力 ・社会性	のばせつる！ 育てへちま
5	・仲間とともに助け合う ・自主・自律 ・選択、収集能力	一人でも みんな でも　できる
6	・発信力 ・行動力	共に生きる









こうした小学校における取り組みの最初は１年生から始まりますが、1年生には保育所に通っていた子ども、幼稚園に通っていた子ども、家庭で育てられた子どもと異なった環境で育った子どもたちが一度に入ってくることになります。

1年生の担任教員としては、校区内の保育所や幼稚園ではどのような目標を設定して保育を行っているのか、家庭で育ってきた子どもたちは地域との関わりや友だちとの関係をどのように作ることができるのかといったことを把握することから始まります。

現在、小学校や保育所、幼稚園間で相互の情報交換のための施設見学や実践交流が行われているのはこのためです。

当協会は、保育所、幼稚園、小学校の各校種で、保育士や教員への研修や子どもたちを対象とした環境教育実践を実施させていただいており、ESDでの「育みたい力」を連続したものとして捉える事が求められますし、これらの活動や情報をつなぐ役割も担っていることを痛感しています。

今年度も、小学校、中学校の新任教員研修を実施します。昨年度に行った乳幼児を対象としたESDの考え方を盛り込んだ研修を行うことができればと考えています。